

社会ガバナンスのグラムシ主義的解釈

——J. S. デーヴィスの議論を中心に——

中部学院大学 福地潮人

1 目的

本報告の目的は、グラムシ主義の立場に立つ英国の政治学者 J.S. デーヴィスの社会ガバナンス論批判を読み解くことを通して、今日の社会ガバナンス論が抱えている課題を明らかにすることである。ここでいう社会ガバナンスとは、社会における諸問題の調整と解決をはかる過程のことである。社会ガバナンス論自体はすでに注目を集めてから 20 年以上の時を経ており、もはや新しい議論ではない。しかし、近年ではこれとデモクラシーやメタガバナンスとの関係が論じられるなど、一層の発展を見せている。また、社会ガバナンス論はしばしばネットワーク・ガバナンス論とも呼ばれるように、市民セクターを中心とする中間団体によって構成されたネットワークによる自己調整に着目することが多い。

2 方法

しかしながら、このようなネットワーク・ガバナンス論を批判し、グラムシ主義者の立場から独自のガバナンス観を提示している論者がいる。それが英国の政治学者 J. S. デーヴィスである。本報告では、方法として、まずこれまでのネットワーク・ガバナンス論の展開を確認した上で、それらに対するデーヴィスによる批判を詳細に捉えることを通して、今日のガバナンス論の抱える課題を明らかにする。

3 結果

デーヴィスによると、ネットワーク・ガバナンスそのものはグラムシの言う「統合国家」の一形態であり、強制と同意が複雑に絡み合ったヘゲモニー装置に他ならない。彼によると、ガバナンス論を展開しているグラムシ主義者は主に 3 つの流派に分類される。すなわち、①正統派グラムシアン、ジェソップに代表される②ネオグラムシアン、ベヴィアなどのガバナンス論者を中心とした③ポスト・グラムシアンである (Davies 2011: 129-130)。これらのうち、デーヴィス自身は①の正統派グラムシアンの立場に立ちつつ、他派を批判する。例えば、各々が社会変革の主体としてあげているのは、②が社会運動、③がネットワークであるが、①はなおも「階級」をあげている。

4 結論

グラムシアンの見る市民社会は、私的なアソシエーションから構成された空間ではあるものの、それらは決して自生的に民主的な性格を帯びたものではない。市民社会はむしろ国家のもう一つの側面であり、政治社会という「強制の鎧を着けたヘゲモニー」に他ならない。デーヴィスがガバナンス・ネットワークを強制と同意を生み出すヘゲモニー装置と見なした点も、世に溢れるネットワーク礼賛論に対する警告として注目に値する。しかしながら一方で、果たして、デーヴィスのように「階級」を変革の主体と位置づけることは、今日もなお可能なのだろうか。疑問が残る点である。

文献

- Davies, J. S. (2011) *Challenging governance theory: From networks to hegemony*, Policy Press.
——— (2017) *Rethinking the Local State: A Gramscian Account of Austerity Governance in the English City of Leicester*. (unpublished draft).